心肺蘇生法に神様は必要か？　ヘルメス編

『溜息を吐くと、幸福が逃げる』という話を聞いたことがあるだろうか？

俺は今日、幸福を何回逃がしたか分からない。

その原因は、こいつだ。

「はー、へー、ほほう……」

　俺の目の前にいる、手の平二つ分位の大きさの、まるで妖精みたいな奴が、銀翼をパタパタと震わせている。昨日買った……というか俺が買ってやった食玩に、さっきからずっと感心したような声を上げていた。

　ちなみに当たったのは赤いコンビニの模型だ。コンビニはスーパーの分類には入らないだろうと思わず突っ込んだ。

「この世界の技術は、我々の世界よりも素晴らしいですねぇ。ちっちゃいのに、細かいです」

　この台詞も、何回聞いたか分からない。確かお前の目当ては、この間いったスーパーの模型だったと思うのだが。残念がるかと思ったが、意外にもこいつはそんな事もなく、食玩を楽しんで（？）いた。

「なんだか興奮しちゃいますねぇ」

「……おい。いいのか？」

　いい加減、妖精モドキに聞いている。今はお昼。昼食はもう済ませた。

　俺の記憶が正しければ、確か俺は昨日こいつと出会って、こいつの『護衛対象』を探すことになったはずだ。そこでテュポーンとやらと出会い、どうやったのかは知らないがテュポーンを追い払い、妖精モドキからそこら辺の事を詳しく聞こうとした所で昨日は終わった。

　まだ『護衛対象』は見つかっていないはずなので、今日はもっと本腰を入れて探さなければならないはずで、俺としては出来る限り協力するつもりではある。

　あるのだが……

「瞬様、どうかされました？」

　昨日必死に頼み込んできたはずの本人は、これだった。まるで『護衛対象』に興味を失ったかのような変わりようである。

　しかも、

「『瞬様』はやめろ」

　これである。朝からずっと、俺のことを呼ぶときはこれなのだ。背中がなんかこそばゆいから止めて欲しいことこの上無い。

　てか、それよりも、だ。

「『どうかされましたか？』じゃ無いだろう。昨日言っていた『護衛対象』とやらは探さなくていいのか？」

　それを聞いて、一瞬ピタリと空中で動きを止める妖精モドキ。動いているのは羽だけだ。表情も固まった。

「……あれ？　どうかしたのか？」

　まさかこんな反応をされるとは思っていなかった俺。

「え……ええっと、ですね」

　目を泳がせながら、妖精モドキは消えるような声を漏らす。

　ん？　どうしたんだ？

「……もしかして、全部嘘でした、なんて言うつもりじゃ」

「無いですよ、勿論」

　激しく頭を上下に振るが、目の動きが凄いことになっている。これじゃ嘘ついていると言っているようなものだ。

　問い詰めようとした、その時。

「ただ……その……ですね」

「どうした？」

「探す必要が無くなった、とでも言いましょうか」

「はい？」

　素っ頓狂な声を上げる俺。一体どういうことだろうか。

「あの……お時間よろしいでしょうか？　お話したいことがあります」

　俺が質問しようとするのと同時に、妖精モドキは先程までの動揺はどこへやら、何か決意したような表情を浮かべ、そう言った。

「……それは、昨日の事か？」

「……はい。ただ、他にもいくつか。例えば、そうですね――」

　そこまで言った時、空気が少し違うものに変わったように感じたのは、俺の気のせいじゃないと信じたい。

「私達が一体何者なのか、知りたくはありませんか？」